

# 異年齢保育における2歳児の乳児に対する養育的行動

—保育士評定による性差、月齢差、きょうだい差の検討—

北 田 沙也加

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

清 水 由 紀

埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：養育的行動、世話行動、トドラー、幼児期、異年齢保育

## 1. 問題と目的

日本では近年、幼稚園入園前の0～2歳児の保育の需要が増え、保育形態も異年齢保育や家庭内・小規模保育などのように多様化している（厚生労働省子ども家庭局保育課, 2018）。したがって、乳幼児、特に0～2歳児が保育現場で相互作用する機会は今後ますます増えると考えられる。本研究では幼児期、特に2歳児の自分より幼い乳児に対する関わりについて焦点を当て、実際に保育現場において、幼児はどのように乳児に接しているのかについて検討する。

先行研究では0～5歳児の異年齢交流活動の中で、3歳以上児が0歳児を可愛がったり、3歳未満児をうまくリードして遊びを進めたりし、活動後も日常的に乳児に関心を持ち、可愛がったり食事や着替え等の世話をしたりする姿が報告されている（庵, 2016; 仲野・小川, 2016; 大久保, 1986）。また0～2歳児が共に過ごす乳児院（Kaneko & Hamazaki, 1987）や0～2歳児、0～5歳児が共に過ごす保育所（石川, 2016; 北田, 2018; 光本・古川・久保・大瀬戸・中原, 2000; McGaha, Cummings, Lippard, & Dallas., 2011; 大桑, 2014）における実践記録や観察調査において、幼児が2歳頃から自分より幼い0～1歳児の世話をしたり、なでたり抱っこしようとしたりなど積極的に身体接触をしたりする姿が報告されている。このような保育現場で見られる乳児に対する幼児の行動が、対乳児特有のものなのか、同輩や大人に対しても同様に行われるものかを検討するため、北田(2018)は、0～5歳児が過ごす異年齢保育において2～5歳児の乳児、幼児、大人に対する行動を観察した。その結果、世話（e.g., 身だしなみを整えてあげる）、分与（e.g., 玩具を渡す）、大人を介する援助（e.g., 相手の様子や状況を保育士に伝える）、愛撫（e.g., 頭やほほをなでる）といった「養育的行動」が、幼児や大人に対してよりも、自分より幼い乳児に対して相対的によく行われることが示唆された。したがって以下では、異年齢保育において幼児が乳児に対して行う行動を「養育的行動」と記すこととする。

このように先行研究では、乳幼児が共に過ごす保育現場において、幼児が2歳頃から自分より幼い乳児に対して世話、分与、大人を介する援助、愛撫といった養育的行動を行うことが明らかになっている。しかし、先行研究のほとんどが事例検討であり、観察調査で量的に検討し、対乳児特有の養育的行動を見出した北田（2018）も1園と限られたサンプルから得られたデータに基づいたものである。このように、異年齢保育において幼児が乳児に関わる具体的な姿は多く報告されているにもかかわらず、乳児に対する幼児の養育的行動を客観的に捉える指標がないため、以下2点が明らかになっていない。

第1に、幼児が日常的にどのくらいの頻度で乳児に関わるのかということである。先行研究において幼児が乳児にどのように接しているか、具体的な姿は記載されているが、事例検討や1園の

サンプルが多く、その園や活動の特徴が反映されている限られたデータであるため、乳児に対する養育的行動が日常的にどのくらいの頻度で生起するののかということは明らかでない。異年齢保育を行う保育現場において、乳児に対する養育的行動はどのくらい普遍的に見られるものなのだろうか。また、乳児に対する養育的行動として世話、分与、大人を介する援助、愛撫が挙げられたが(北田, 2018)、このような行動内容によって出現頻度に違いがあるのかなども分かっていない。幼児が乳児に養育的行動を行うという現象だけ捉えるのではなく、指標として捉えることができれば、乳児に対する行動の生起についてより理解を深めることができると考えられる。

第2に、どのような子が乳児に関わりやすい(関わりにくい)のかという点が明らかにされていない。乳幼児が共に過ごしていても乳児に積極的に養育的行動を行う子もいれば、乳児と全く接せずに自分の遊びに没頭している子もいるように、養育的行動の表出は個人差が大きい(石川, 2016; 北田, 2018; McGaha et al., 2011)。この個人差については、面識のない0～1歳児と対する場面を設定し、幼児の反応を観察した先行研究(Berman & Goodman, 1984; Berman, Monda, & Myerscough, 1977; Berman, Smith, & Goodman, 1983; Jessee, Strickland, & Jessee, 1984; Lee & Jessee, 1997; Melson & Fogel, 1982)において、性別、月齢、きょうだい構成による違いが検討されてきた。それらの研究からは、男児よりも女児の方がよく乳児に関わり(Berman et al., 1977)、この性差は2～3歳では萌芽的にしかみられないが(Jessee et al., 1994; Lee & Jessee, 1997)、4～5歳児で特に顕著にみられることが明らかになっている(Berman & Goodman, 1984; Berman et al., 1983)。また、きょうだいをもたない2～3歳児よりももつ子の方が乳児によく関わったり(Lee & Jessee, 1997)、弟妹をもつ女児がより乳児に関わったりすることが示唆されている(Berman et al., 1977)。しかしきょうだいによる差がないという結果も報告されており(Melson & Fogel, 1982)、これまで一貫した結果は得られていない。また、これらの先行研究は1970～90年代に海外で行われた実験場面における幼児の乳児への反応を調べたものであるため、現代日本における保育現場で日常的に見られる乳児に対する幼児の養育的行動についても同様に説明できるのか疑問が残る。どのような子が乳児に関わりやすい(関わりにくい)のか、その個人差について捉えることができれば、異年齢保育における子ども理解をより深めることができるだろう。

そこで本研究は、乳児に対する2歳児の行動について、量的に捉える指標を作成し、性別、月齢、きょうだい構成による違いを明らかにすることを目的とする。具体的には、先行研究に基づいて乳児に対する行動を捉える質問紙を作成し、2歳児クラスに在籍する子どもについて保育士に評定してもらう。そして2歳児は乳児に対する養育的行動をどのくらいするのか、性別、月齢、きょうだい構成による違いが見られるのかということを明らかにする。養育的行動の表出の個人差に影響を及ぼす要因は多様に考えられるが、まずは先行研究(e.g., Berman et al., 1977)で示されている性差やきょうだい差が現代日本の保育現場でも同様に見られるのかを検討する。本研究では、保育士を対象にした質問紙調査を実施したが、それにより保育現場における養育的行動の実態を明らかにすることができると考えられる。

## 2. 方法

### (1) 協力者

関東圏内のA市立保育園9園<sup>注1)</sup>の2歳児クラス担任保育士32名(男性4名、女性28名、平均

年齢34.4歳、 $SD=9.9$ 、平均保育暦8.7年、 $SD=7.6$ )。質問紙法により、クラスに在籍する子ども212名について回答を求めた。記入漏れ等回答に不備があった21名を除いた191名(男児92名、女児99名、平均月齢39.3ヶ月、 $SD=3.4$ )の回答を分析対象とした。

## (2) 手続き

各協力園を通して質問紙を配布し、クラスに在籍する子どもについて担任保育士に記入してもらった。2016年12月～2017年2月に実施し、配布してから回収までの記入期間は二～三週間とした。

## (3) 質問紙

0～2歳児と一緒に過ごす場面における乳児(0～1歳児)に対する対象児の行動をたずねる19項目。先行研究(Berman et al., 1977; Jessee et al., 1994; Kaneko & Hamazaki, 1987; 北田, 2018; McGaha et al., 2011; Melson & Fogel, 1982)を基に独自に作成した。この19項目は、事前調査において現役保育士4名により、2～3歳児が乳児に対する行動として保育現場から見ても妥当だと判断された項目からなり、内容的妥当性が確保されている。泣いていたり困っている乳児をなぐさめたり助けたりするような場面ではなく、普通の場面で日常的に見られる関わりについて、どのくらいの頻度で19項目の行動をおこなうか、「1. 全くしない」、「2. ほとんどしない」、「3. どちらともいえない」、「4. よくする」、「5. いつもする」の5段階評定で求めた。また、フェイスシートとして子どもの性別、月齢、きょうだいの有無、保育士(回答者)の性別、年齢、保育歴について回答を求めた。

## (4) 分析

まず質問紙の信頼性を折半法と再検査法により検討した。折半法では、奇数項目と偶数項目の相関係数を用いて信頼性係数を算出した。再検査法では、質問紙を回収した二週間後に、子ども20名分の評定を再度求め、一回目の評定と二回目の評定との相関係数から信頼性を判断した。信頼性の検討後、因子分析を行い、養育的行動がいくつかの因子にまとまるかを検討した。そして各因子得点を算出し、性別や月齢、きょうだい構成による違いを検討した。統計ソフトはSPSS24を用いた。

## (5) 倫理的配慮

本研究の遂行にあたり、事前に自治体の保育運営課および研究協力園9園に調査目的を説明し、調査実施への許可を得た。質問紙の配布・回収は筆者が協力園に伺い、直接手渡しで行った(回収率100%)。回収までの間及び回収後、質問紙は保育園内や筆者の所属機関において鍵のかかる場所で厳重に保管した。また、子どもを匿名化して回答するよう求めると共に、得られた回答も記号化することで、個人を特定できないよう配慮した。

# 3. 結果

## 3-1 信頼性の検討

### (1) 折半法

奇数項目の合計( $M=21.36$ 点、 $SD=8.62$ )と偶数項目の合計( $M=18.96$ 点、 $SD=7.22$ )の相関係数 $r=.937$  ( $p<.001$ )をスピアマン・ブラウンの公式にあてはめると $\rho=.967$ となり、高い信頼性が得られたため、内的整合性はあると判断した。

## (2) 再検査法

一回目評定の平均 ( $M=1.83$ 点、 $SD=0.67$ ) と二回目評定の平均 ( $M=2.01$ 点、 $SD=0.72$ ) の相関係数は  $r=.672$  ( $p<.01$ ) となり、有意な中程度の正の相関が見られたため、信頼性はあると判断した。

## 3-2 因子分析

乳児に対する2～3歳児の養育的行動19項目について得点化し、最尤法による因子分析を行い、プロマックス回転により3因子を抽出した。全項目で因子負荷量が.40以上となり、2因子以上にわたって因子負荷量が高い項目もなかったため、19項目すべてが3因子に分けられた。プロマックス回転後の各項目の因子負荷量を表1に示す。

表1 2歳児の乳児に対する養育的行動 プロマックス回転後の因子負荷量

	I	II	III
18_衣服や髪型などの身だしなみを整えてあげる	<b>0.925</b>	0.078	-0.120
17_玩具や自分の表情・動作で相手の気を自分にひきつける	<b>0.858</b>	-0.036	0.078
19_いないいないばあをする	<b>0.841</b>	-0.109	-0.027
4_鼻水やよだれをふいたりして、身体をきれいにしてあげる	<b>0.714</b>	0.112	0.011
16_玩具や遊具などの遊ぶ順番をゆずる	<b>0.552</b>	0.135	-0.001
14_声をかけたり手をひいたりして一緒に遊ぼうと誘う	<b>0.535</b>	0.030	0.344
12_手を叩いたり呼びかけたりして相手の行動を促す	<b>0.534</b>	-0.003	0.338
15_ほしがっているものを渡すなど、相手のやりたがっていることが実現するように手伝う	<b>0.442</b>	0.321	0.128
2_相手の様子や行動について「○○してたよ」と言ったり指さしたりして保育者に伝える	-0.181	<b>0.933</b>	0.078
9_園やクラスのルールをやぶったら注意する	0.253	<b>0.790</b>	-0.315
11_「～ちゃんに○○した」など、関わったことについて保育者に伝える	0.006	<b>0.746</b>	0.115
5_関心をもち、「この子はだれ？」などと保育者にたずねる	0.013	<b>0.680</b>	0.069
13_相手の様子や行動について「～ちゃんどうしたの？」などと保育者にたずねる	0.119	<b>0.647</b>	0.112
3_絵本や玩具を見せる	0.119	<b>0.546</b>	0.258
6_玩具や制作物を自発的に渡したり、渡そうと差し出す	0.094	<b>0.495</b>	0.338
8_顔やほほをさわったりなでたりする	0.119	-0.208	<b>0.966</b>
10_近づく	-0.033	0.007	<b>0.804</b>
1_頭をなでる	-0.122	0.239	<b>0.786</b>
7_名前を呼んだりして呼びかける	0.016	0.215	<b>0.666</b>
因子間相関		0.719	0.704
			0.761

第1因子は「衣服や髪形などの身だしなみを整えてあげる」、「いないいないばあをする」など、乳児の身辺を整えたり、乳児をあやしたりして直接的に乳児に接する行動8項目がまとまったため、



「世話」と命名した。 $\alpha$ 係数は.928であった。

第2因子は「相手の様子や行動について『○○してたよ』と言ったり指さしたりして保育者に伝える」、「絵本や玩具を見せる」など、保育者や玩具を介して関わる行動7項目がまとまったため「大人・物を介する援助」と命名した。 $\alpha$ 係数は.929であった。

第3因子は「顔やほほをさわったりなでたりする」、「近づく」など、顔や頭をなでたり、直接関わらずに近づいたりする行動4項目がまとまったため、「愛撫・関心」と命名した。 $\alpha$ 係数は.910であった。

### 3-3 月齢、性別、きょうだい構成による違い

各因子を構成する項目の合計得点を、それぞれ項目数で割った平均点を算出し、性別、月齢ごとの平均値及び標準偏差を表2に示した。月齢や性別、きょうだい構成による違いを検討するため、養育的行動（世話、大人・物を介する援助、愛撫・関心） $\times$ 月齢（平均未満、平均以上） $\times$ 性別（男児、女児） $\times$ きょうだい構成（弟妹あり、弟妹なし）の分散分析を行った。

養育的行動の主効果が有意であり（ $F(2,366)=107.36, p<.001, \eta^2=.37$ ）、「世話（1.84点）」が最も低く、次いで「大人・物を介する援助（2.35点）」が高く、「愛撫・関心（2.61点）」が最も高かった。2～3歳児は乳児に対して、顔や頭をなでたり、呼びかけたりする行動を一番しやすく、保育者や物を介して関わる行動や、直接的な世話はあまりしないことが明らかとなった。

月齢の主効果（ $F(1,183)=8.19, p<.01, \eta^2=.04$ ）、性別の主効果（ $F(1,183)=5.45, p<.05, \eta^2=.03$ ）も有意であり、低月齢児（2.12点）よりも高月齢児（2.42点）、男児（2.08点）よりも女児（2.45点）の方が乳児に養育的行動をしやすいたことが明らかとなった。また月齢 $\times$ 性別の有意な交互作用が見られ（ $F(1,183)=8.89, p<.01, \eta^2=.05$ , 図1）、平均39ヵ月未満の低月齢児では養育的行動の得点に有意差は見られなかったが（ $t(94)=0.88, n.s.$ ）、平均39ヵ月以上の高月齢児では男児より女児の方が有意に得点が高かった（ $t(93)=4.11, p<.001$ ）。さらにきょうだい構成の主効果が有意であり（ $F(1,183)=5.75, p<.05, \eta^2=.05$ ）、弟妹をもたない子（2.11点）より、もつ子（2.42点）の方が乳児に養育的行動をしやすいたことが示唆された。なお、養育的行動を含む交互作用はいずれも有意ではなかったことから、上記の性差や月齢差、弟妹の有無による差が、養育的行動の内容によって異なることはなかった。

表2 月齢・性別・弟妹の有無ごとの平均得点（SD）

	低月齢				高月齢			
	男児		女児		男児		女児	
	弟妹なし	弟妹あり	弟妹なし	弟妹あり	弟妹なし	弟妹あり	弟妹なし	弟妹あり
世話	1.54 (0.65)	1.80 (1.02)	1.69 (0.68)	1.66 (0.53)	1.49 (0.64)	1.89 (0.84)	1.98 (0.87)	2.68 (0.67)
大人・物を 介する援助	1.93 (0.85)	2.37 (1.03)	2.29 (0.84)	2.03 (0.61)	2.12 (1.03)	2.25 (1.05)	2.66 (0.97)	3.18 (0.70)
愛撫・関心	2.22 (0.97)	2.88 (1.25)	2.49 (0.84)	2.48 (0.79)	2.05 (0.97)	2.44 (1.23)	2.88 (0.99)	3.42 (0.64)

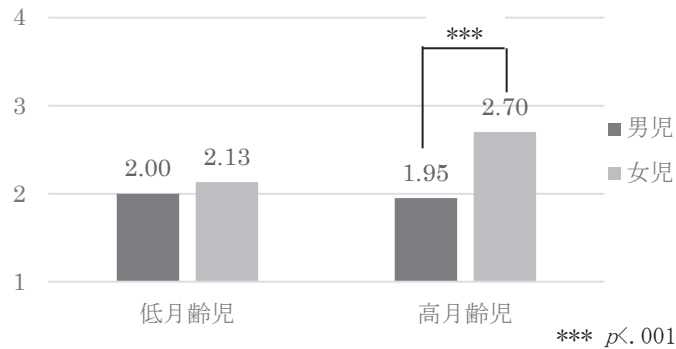


図1 月齢×性別の交互作用

## 4. 考察

本研究は、乳児に対する養育的行動について質問紙を作成し、2歳児の養育的行動を量的に検討した。また養育的行動の性別、月齢、きょうだい構成による違いを明らかにした。

### 4-1 2歳児の乳児に対する養育的行動

これまで保育現場において幼児が乳児にどのように関わっているか、養育的行動の具体的内容が複数の先行研究で共通して示されていたが、幼児期の養育的行動を捉える客観的な指標はなかった。複数の保育所に在籍する191名の子どもからのデータから量的分析を行った本研究において、2歳児の乳児に対する養育的行動は頻繁に生じるものではなかったが、どの保育所でも日常的に見られるものであり、その内容は「世話」、「大人・物を介する援助」、「愛撫・関心」の3因子構造であることが明らかとなった。これらは先行研究（石川, 2016; Kaneko & Hamazaki, 1987; 北田, 2018; 光本他, 2000; McGaha et al., 2011; 大桑, 2014）で報告されていた乳児に対する幼児の行動ともその内容が一致する。

分析の結果、全体的に得点は低めであったが、その中でも2歳児は「愛撫・関心」をよく行い、次いで「大人・物を介する援助」、「世話」をあまり行わないことが示された。このような内容による違いが見られたのは、その行動をするのに相手の様子・状況を把握したり気かけたりすることがあるか否かの違いであると考えられる。乳児の身だしなみを整える、あやすといった「世話」や、乳児の様子について保育者に伝えたりする「大人・物を介する援助」は、行動の受け手である乳児の様子や状況を把握し、乳児に合わせて、自分の行動を調整しなければならない。一方、「愛撫・関心」は、乳児に触ったり近づいたりするだけなので、乳児の様子に合わせなくてもできるものである。そのため、2歳児の養育的行動は「愛撫・関心」が最も多く、乳児の様子に合わせて行うが間接的に乳児に関わる「大人・物を介する援助」が次いで多く、直接的に乳児と関わる「世話」はあまり見られなかったと考えられる。異年齢保育場面での観察調査を行った井上（2016）や北田（2018）でも、2歳児頃は乳児の様子やその場の文脈に関係なく、乳児をなでたりするが、4歳頃になるとおもちゃを使ってあやしたり直接的な世話をするなど応答的な関わりができるようになることが示唆されている。このことから、2歳児はなでたり近づいたりすることで乳児とコミュニケーションをとることが主であり、直接的な世話行動はまだ萌芽的にしか見られないが、4歳以降、心の理論や他者視点の獲得、自己調整機能の発達に伴い、乳児とより応答的な関わりができるようになると考えられる。本研究は2歳児クラス在籍児のみを対象としたため、今後3～5歳児

も含めた調査を行い、養育的行動の発達について検討する必要がある。

一方で、このような行動内容による評定の違いが見られたのは、行動内容によって評定者である保育士の気付きやすさが異なるためだとも考えられる。北田（2018）において、幼児は自発的に乳児に養育的行動をすることが多く、乳児の状況や文脈が養育的行動の表出に影響する可能性が示唆された。幼児は乳児の世話をする人物として成人女性が適任であると理解しており（糊澤, 2011; Melson et al., 1986）、乳児の状況や文脈に合わせて養育的行動を行うことができるということが示唆された（北田, 2018）ことから、幼児は保育者がそばにいる状況だと自分が乳児の世話をしなくても保育士に任せの方がよいと考え、世話をあまりしないのかもしれない。そのため、評定者である保育士が把握できる状況において「世話」があまり見られず、得点が低くなったのだと考えられる。一方で「愛撫」は単純に乳児をかわいがる行動であり、「大人・物を介する援助」も間接的に乳児に関わる行動であるため、「世話」に比べて評定者である保育士がそばにいる状況・見ている状況でも生起しやすく、「世話」よりよく行われるという評定になったと考えられる。このように、本研究は保育士評定としたため普段の保育の中で保育士が把握できる姿しか捉えられていないという限界点がある。質問紙の妥当性を確保するためにも、今後は第三者である観察者も評定に入り、保育士がそばにいない状況なども含めて幼児の乳児に対する行動を客観的に捉える必要があるだろう。

#### 4-2 月齢、性別、きょうだい構成による養育的行動の違い

先行研究を踏まえ、性別、月齢、きょうだい構成による養育的行動の違いを検討したところ、有意な性差、月齢差、弟妹の有無による差が見られた。平均月齢（39ヵ月）未満の低月齢児では男児も女児も同じくらい養育的行動を行っていたが、平均月齢以上の高月齢児では、男児よりも女児の方がよく養育的行動を行っており、先行研究（e.g., Berman et al., 1977）と一致する結果が得られた。これは、生物学的な性の違いに加えて、幼児が発達に伴い自身の性を意識し、社会生活の中で「乳児の世話＝女性」というイメージをもつようになるため（Berman et al., 1977; Lee & Jessee, 1997; Melson & Fogel, 1982）、高月齢において乳児に対する養育的行動が男児で抑制され、女児で促進されたと考えられる。一方で保育士評定としたため保育士のバイアスが効いている可能性もある。より性差がはっきりしてくる高月齢において、保育士からしても幼児の性の違いが意識されやすく、女児の方が養育的行動をしやすいというジェンダーバイアスが効いていた可能性が考えられる。しかしこのようなジェンダーバイアスがあるとすると養育的行動をあまり行わないという先入観を持っている男児が養育的行動を行っていても余計目につきやすくなることもあると考えられ、必ずしも女児で養育的行動の評定が高くなるバイアスが効いているとも言い切れない。また、実際に乳児に接する幼児の反応を観察した先行研究（e.g., Berman et al., 1977）と同様の結果が得られていることから、保育士の性意識というよりは、子どもの中での性や性意識の発達が影響しているとみるのが妥当だと考えられる。

また、全体的に弟妹をもたない子よりももつ子の方が乳児に養育的行動をよく行っていた。弟妹をもつ子は家庭でも乳児に接しており、親から乳児への接し方を教えてもらったり、乳児の世話を頼まれたりすることもある（Berman et al., 1977; Lee & Jessee, 1997）。このように弟妹をもつ子は家庭での経験から、乳児に慣れ親しみ、乳児の扱い方への理解も深めるため、弟妹をもたない子よりも養育的行動をよく行っていたと考えられる。またこの弟妹の有無による違いについても、前述したように評定者である保育士のバイアスが影響している可能性がある。保育士が幼

児の弟妹に対する関わりを直接見ていなくても、保護者から家庭での様子を聞いたりして普段きょうだいとどのように関わっているかの情報は持っていると考えられる。そのため「家庭で弟妹ともよく遊んでいるみたいだからこの子は他の乳児にも養育的行動をしやすいだろう」などという先入観が評定に影響している可能性も否定できない。身内であるきょうだいの乳児に対する養育的行動には親（保護者）を意識した行動や親（保護者）に促されて行った行動も含まれることから、家族以外の乳児に対する養育的行動とは質が違うと思われるが、このような乳児との関係性の違いが幼児の養育的行動にどのように影響するのかも今後検討する必要があると考えられる。

#### 4-3 今後の課題

本研究において、これまで現象的にしか捉えられてこなかった乳児に対する幼児の養育的行動を指標として量的に捉えることができた。乳幼児が共に過ごす保育現場において、幼児が乳児に関わるのは決して多くはないが、どの保育所でも日常的に見られること、また養育的行動の表出には個人差があることが改めて示唆された。行動内容による違いは見られなかったが、高月齢において男児より女児の方が乳児によく接すること、弟妹がいない子よりもいる子の方がよく接することが明らかとなり、性別・性役割やきょうだい構成が乳児に対する行動表出の違いに影響する可能性が示唆された。

最後に、本研究で残された課題を踏まえ、2つの視点から今後の展望を述べる。第1に、本研究で作成した質問紙の妥当性を検討する。保育現場における2歳児の乳児に対する養育的行動を捉える質問紙を作成し、担任保育士に評定を求めたが、その評定が実際の子どもたちの行動をどのくらい正確に捉えられていたのか、その妥当性を検討するに至らなかった。保育士評定としたため、評定者である保育士の主観が反映されていたり、保育士が把握していない状況における子どもの行動は捉えられていなかったりする。今後は、新たな保育施設で保育士に質問紙評定を求めると同時に観察調査も行い、第三者の観察者の評定との相関を見ることで質問紙が実際の乳児に対する行動を捉える妥当なものであるかどうか確かめる研究を行う必要がある。

第2に、養育的行動について性別やきょうだい以外の要因の影響を検討する。本研究では先行研究を踏まえ、まずは性別やきょうだい構成による養育的行動の表出の違いを検討したが、養育的行動の表出に影響するのは性別やきょうだい構成だけではない。大人のモデルを示すと幼児の養育的行動が促されることから（Berman & Goodman, 1984）、幼児は生活の中で周囲の大人が乳児を世話する様子を見たり、家庭や子ども集団の中で多様な人物に世話されたりすることを通して、乳児への接し方や世話について学習すると考えられる。青年期における養護性の高さに被養育経験が影響する（棚澤・福本・岩立, 2009）ことから、幼児がこれまでどのような養育を受けてきたかという被養育経験が幼児の養育的行動に影響すると予想できる。さらに行動の移しやすさや他者との相互作用に関する気質も養育的行動表出に影響すると考えられる。本調査において、行動内容によって性差やきょうだい差は変わらなかったが、それぞれの行動が表出するプロセスや他の要因が異なる可能性が考えられる。今後は性別やきょうだい以外の要因として、被養育経験や他者との相互作用に関する気質等を取り上げ、養育的行動の生起要因やプロセスを検討する必要がある。

注

（注1）どの協力園も0～2歳児クラスは年齢別クラスであるが、朝・夕方の延長保育の時間は異年齢保育



の形態をとっている。また、日中も園庭やホール等で異年齢で関わる機会が日常的にある。

#### 付記

本論は、第一著者の東京学芸大学大学院平成30年度博士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

#### 謝辞

本研究にご協力くださいましたA市の職員の皆様、協力園の保育士の先生方に心より感謝申し上げます。また本研究についてご指導・ご助言くださいました植草学園短期大学・大学の中澤潤教授に深く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 庵 幸世 (2016). 異年齢交流から見えてくるもの—3歳未満児と3歳以上児—保育所保育実践研究・報告集 (日本保育協会保育科学研究所), 10, 120-124.
- Berman, P. W. & Goodman, V. (1984). Age and sex differences in children's responses to babies: Effects of adults' caretaking requests and instructions. *Child Development*, 55, 1071-1077.
- Berman, P. W., Monda, L. C., & Myerscough, R. P. (1977). Sex differences in young children's responses to an infant: An observation within a day-care setting. *Child Development*, 48, 711-715.
- Berman, P. W., Smith, V. L., & Goodman, V. (1983). Development of sex differences in response to an infant and to the caretaker role. *The Journal of Genetic Psychology*, 143, 283-284.
- 石川洋子 (2016). 0～5歳児における異年齢児との人間関係の発達的变化—0～2歳児との関わりに焦点を当てて—文教大学教育学部紀要, 50, 1-9.
- Jessee, P. O., Strickland, M. S., & Jessee, E. J. (1994). Infant and toddler interactions with a new infant in a group environment. *Early Child Development and Care*, 100, 57-68.
- Kaneko, R., & Hamazaki, T. (1987). Prosocial behavior manifestations of young children in an orphanage. *Psychologia*, 30, 235-242.
- 北田沙也加 (2018). 異年齢保育における幼児の乳児に対する養育的行動 保育学研究, 56, 187-198.
- 光本凉子・古川律子・久保節枝・大瀬戸愛・中原正博 (2000). 異年齢児クラスにおける関わりでの育成と発達の保障に関する研究 広島女子大学子ども文化研究センター, 5, 91-103.
- 厚生労働省子ども家庭局保育課 (2018). 保育所等関連状況取りまとめ【2018 (平成30) 年4月1日】(厚生労働省/「保育所等関連状況取りまとめ (平成30年4月1日)」及び「待機児童解消加速化プラン」と「子育て安心プラン」集計結果) 保育情報, 503, 12-27.
- 棚澤令子 (2011). 幼児期における乳児に対する養護性 (nurturance) 測定法の検討——幼児が乳児をどう捉えているか——発達研究, 25, 47-54.
- 棚澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- Lee, Y-C. & Jessee, P. O. (1997). Taiwanese infants' and toddlers' interactions with a baby in a group setting. *Early Child Development and Care*, 134, 75-87.
- McGaha, C. G., Cummings, R., Lippard, B., & Dallas, K. (2011). Relationship building: Infants, toddlers, and 2-year-olds. *Early Childhood Research and Practice*, 13(1). <http://ecrp.uiuc.edu/v13n1/mcgaha.html> (情報取得2017/5/2)
- Melson, G. F. & Fogel, A. (1982). Young children's interest in unfamiliar infants. *Child Development*, 53, 693-700.
- 仲野悦子・小川博久 (2016). ふれあい遊びを通して子どもの育ちを考える 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 48, 9-24.

大久保和子 (1986). 混合保育に関する研究 岡山県立短期大学研究紀要, 30, 120-130.  
大桑 萌 (2014). 0～2歳児の仲間関係における模倣の役割 保育学研究, 52, 172-182.

(2019年3月29日提出)

(2019年4月19日受理)

# **Two-years-old Children's Nurturing Behaviors toward Infants In Multi-age Childcare:**

The Difference of Sex, Age, and Siblings assessed by Nursery Teachers

**KITADA, Sayaka**

Doctoral Course The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

**SHIMIZU, Yuki**

Department of Psychology and Educational Practice, Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

This study investigated 2-year-old children's "nurturing behaviors" toward infants using the questionnaire developed by the authors for the purpose of this study. Children's "nurturing behaviors" consisted of "caring," "assistance through adults or objects," and "touching or approaching." They engaged more often in "touching or approaching" than "caring" and "assistance through adults or objects." The nurturing behavior score was higher among children with younger siblings than children without younger siblings, among girls than boys, and among older children than younger children. In addition, younger girls engaged in "nurturing behaviors" as much as boys, but older girls engaged more in "nurturing behaviors" than boys. It was suggested that these differences of "nurturing behaviors" by sex or sibling may be affected by children's development of sex role.

**Keywords:** Nurturing behavior, Care, Toddler, Young childhood, Multi-age childcare